

強者の戦略

こんにちは。国語科の松崎です。先日の問題、いかがだったでしょうか。解説を見て、あと一ヶ月類の夏を乗り切ってくださいね。では、問題文の確認からです。

次の文を読んで、後の問に答えよ。

俊成卿云ふ、歌とはよろづにつきて、我が心に思ふことを言葉に言ひ出すを歌といふとのたまひ、定家卿は和歌に師なし、心をもて師とすと仰せられたり。⁽¹⁾おほかた姿はやすく心得たるを、人ごとの心には、余所より、遠く求め出すべきやうに存ずる故に大事なり。

この道、神代より始まりて、わが国の風となれり。人と生るるもの、心なく、言葉なきはあるべからず。しかれば、⁽²⁾その思ふことを口に言はんことかたかるべしや。例へば、あら寒むやと思ひ、小袖を着ばや、火に当らばやと言ひ出す、これすなはち歌なり。歌のはじめは、「*あなにえや」と言ひ出し給ひける、これ歌なり。その後、⁽³⁾心に思ふこと多ければ、言葉も多く言ひつらねき。三十一字に定め、句を五七五七七に定めけることは、「*八雲たつ出雲八重垣」の歌より、⁽⁴⁾この文字数くばり聞きよしとて、今に学べり。されば歌の本体とは、ありのままの事をかざらず言ひ出すを本とせり。

それを万葉の末つかたより、*曲を詠みそへて歌のかざりとしたるなり。⁽⁵⁾例へば「*ほのぼのと明石の浦」と詠めるがごとし。ただ明石の五文字なるべくは、「播磨なる」と置くべきに、ほのぼのと明らかなと言ふを、言の花のほひにしたるなり。その時代にも飾らずありのままによめるもあり。⁽⁶⁾人の化粧したると、ただがほなるとのごとし。

(『冷泉家和歌秘々口伝』より)

(注)

○あなにえや——イザナキとイザナミの二神が天の御柱をめぐりながら互いを褒めたたえあつたという感嘆の言葉。

○八雲たつ出雲八重垣の歌——スサノヲノミコトの歌「八雲たつ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を」。五七五七七形式の最初の歌として知られる。

○曲——おもしろみ。

○ほのぼのと明石の浦——柿本人麻呂の歌「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」。なお、明石は播磨国の瀬戸内海岸にある地名。

問一 傍線部(1)は、人々の考え方が歌の姿(おもむき)を得難くさせていることを述べている。適宜ことばを補って現代語訳せよ。(解答欄：14センチ×4行)

問二 傍線部(2)～(4)を、それぞれ適宜ことばを補って現代語訳せよ。(解答欄：13センチ×2行)

問三 傍線部(5)はどのようなことを言うのか、解釈せよ。なお「明石の五文字」とは「明石に冠する五文字」の意である。(解答欄：14センチ×4行)

問四 傍線部(6)のたとえば、どのような意味か、説明せよ。(解答欄：14センチ×3行)

強者の戦略

出典は『冷泉家和歌秘々口伝』。メジャーな出典ではありませんので、ジャンルを確定するのがなんとなく難しい感じを受けるかもしれませんが、「…和歌…口伝」あたりの単語に注目できれば、和歌についての奥義について論じられている、つまり歌論に近い文章なのではないかと予想ができると思います。

今回の文章に登場する「俊成卿」、「定家卿」は、和歌の大御所である藤原俊成と藤原定家父子のことです。

俊成は後白河院の院宣による『千載和歌集』を単独で編みました。日本を代表する歌たちを単独で選ぶことができるほど、歌壇で重んじられていたんですね。一方の定家も『新古今和歌集』の撰者の一人です。彼らは御子左家という流派でしたが、定家の死後に冷泉家を含む三家に分かれたという事情があります。

さて、高校生は歌論になじみが薄いとはいえ、ほとんどの学校で学習しているであろうものがあります。紀貫之『古今和歌集仮名序』です。「やまと歌は人の心をたねとして～」というフレーズ、聞き覚えありますよね？学校で勉強している、メジャー出典に出てきた概念は押さえておきましょう。そこでは、和歌は人の心がさまざまな言葉として表出されたものである、ということ。ものに感動する心を持った人であれば、誰だって歌を詠む、ということ。鬼神の心も動かして、男女の仲も和やかにし、武士の心を慰めるのも歌である、ということ。和歌は天地開闢の時から存在するが、三十一文字に定まったのは時代がしばらく下ってからである、ということなどが述べられています。

八代集のトップバッター、『古今和歌集』にあるこの言明は、大なり小なり、その後の歌人たちの美意識にすり込まれていたことでしょう。こういったことを意識して、今回の文章を読んでみてくださいね！

「俊成卿云ふ、歌とはよろづにつきて、我が心に思ふことを言葉に言ひ出すを歌といふとのたまひ、定家卿は和歌に師なし、心をもて師とすと仰せられたり」。冒頭部分は、「古今和歌集仮名序」とほぼ同じ事を言っていますね。「歌は万事について自分の心に思ったことを言葉で言い表すことである」、「歌には師匠（手本とすべきもの）はない、自分の心に従うのである」。

「おほかた姿はやすく心得たるを、人ごとの心には、余所より、遠く求め出すべきやうに存ずる故に大事なり」。傍線部解釈の問題です。問1の設問条件に「人々の考え方が歌の姿(おもむき)を得難くさせている」という大意が書いてありますね。直訳すれば、「だいたい、歌のおもむきというものは簡単に理解できるものなのに、人はみな心の中で、他の所から遠く探し求めなければならないように考えているので、困難なのだ」となります。（「人ごと」＝「人毎」、「余所」＝「別の所」、「大事」＝「困難なこと」）

適宜言葉を補う必要がありますから、SVOを中心に補っていきます。直前部分の、「歌というのは自分の心を素直に詠むものなのだ」という内容を踏まえ、「だいたい、歌のおもむきというものは自分の心を素直に表現すれば簡単に理解できるものなのに、人はみな心の中で、他の所からこのおもむきを遠く探し求めなければならないように考えているので、歌のおもむきの感得は困難なのだ」。

「この道、神代より始まりて、わが国の風となれり。人と生るるもの、心なく、言葉なきはあるべからず」。「この道」は、扱われているテーマによって「歌道」だったり「仏道」だったりという違いがありますが、歌論のこの文章では「歌道」で解釈します。「人と生るるもの」は、格助詞「と」の働きに注意

強者の戦略

して、「人と一緒に生まれたもの」ではなく、「人として生まれたもの」と解釈します。「心なく、言葉なきはあるべからず」。ここは迷わず解釈できますね。「心を持たず、言葉をもたないものはいるはずがない」。「しかれば、その思ふことを口に言はんことかたかるべしや」。傍線部の前に因果関係の「しかれば」がありますので、こちらも直前の内容を意識しながら訳出します。「人間はみな心と言葉を持っている。だから、」という流れですね。「その思ふこと」は人が思っていること。「口に言はんこと」の「ん」は助動詞「む」、それが後ろに体言を伴った連体形ですから「婉曲」の用法（ここで詰まってしまった人、大急ぎで文法を確認しましょう）で、「口に出して言うようなこと」。「かたかるべしや」。「かたかる」を漢字に直すと「難かる」。文末の「や」は疑問と反語の意味を持つ言葉で、疑問であれば「人が心で思っていることを口に出して言うようなことは難しいことがあるか?」、反語であれば「人が心で思っていることを口に出して言うようなことは難しいことがあるか、いやない」となります。直前の筆者の主張は、人は心も言葉も持っているということですから、それを表出することは容易であるという主張を読み取りましょう。「人間はみな心と言葉を持っている。だから、人が心で思っていることを口に出して言うようなことは難しいことがあるか、いやない」。

「例へば、あら寒むやと思ひ、小袖を着ばや、火に当らばやと言ひ出す、これすなはち歌なり。歌のはじめは、『あなにえや』と言ひ出し給ひける、これ歌なり」。直前の筆者の主張を補強する具体例ですね。難しい単語もとくにありませんので、解釈に苦しむところはなかったでしょう。「たとえば、『ああ寒い』と思って、『小袖を着たい、火に当たりたい』と言ひ出すのは、これがすなわち歌なのである。歌の初めは、『あなえにや』（という感嘆の言葉を）言ひだしなされた、これが歌である」。

「その後、心に思ふこと多ければ、言葉も多く言ひつらねき」。直訳すれば、「その後、心に思うことが多いので、言葉も多く言い連ねるようになった」ですね。自然な日本語になるように、言葉を補っていきましょう。「その後、人は心に思うことが多いので、それを言い表す言葉も多く言い連ねるようになった」。初めは「あなえにや」といった感嘆の言葉だったのですが、それがだんだんと長くなってきたということですね。

「三十一字に定め、句を五七五七七に定めけることは、『八雲たつ出雲八重垣』の歌より、この文字数くばり聞きよしとて、今に学べり」。だんだんと長くなってきた和歌は、最終的には五七五七七という、三十一文字に落ち着きます。「和歌の文字数を三十一文字に定め、句を五七五七七に定めたことは、『八雲たつ出雲八重垣』の和歌以来、この三十一文字と句の五七五七七という文字の配置は耳に心地良いということで、今でもそれに従っている」。注意すべきは「文字配り」の訳出くらいでしょうか。「文字を配ること」つまり、文字の配置。和歌の文字配置は五七五七七の三十一文字、という順に考えていけば良いでしょう。

「されば歌の本体とは、ありのままの事をかざらず言ひ出すを本とせり」。「そうであるので、歌の本質とは、ありのままのことを飾らず表現したものを本来のものとしている」。

「それを万葉の末つかたより、*曲を詠みそへて歌のかざりとしたるなり」。「ところが、万葉集の末の時代頃から、おもしろみを付け加えて歌の装飾としているのである」。本来の和歌は飾らないものですが、万葉集の末頃から、飾りをつけ始めたと言うことで、「それを」を逆接と解釈します。

強者の戦略

「例へば『ほのぼのと明石の浦』と詠めるがごとし。ただ明石の五文字なるべくは、『播磨なる』と置くべきに、ほのぼのと明らかなと言ふを、言の花のにほひにしたるなり」。傍線部の解釈です。こちらも設問条件に「明石の五文字」とは「明石に冠する五文字」であるというヒントがあるのでそれを利用すると言うことと、傍線部の冒頭、「例へば」に注目することが大切です。何の具体例としてこの傍線部が示されているのか？直前を見れば、「もともとは飾り気の無かった歌に、おもしろみという飾りがつけられるようになった」ということ具体例ということがわかりますよね。

柿本人麻呂の「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」という和歌の中の、「ほのぼのと明石の浦」という言葉遣いが、おもしろみを付け加えたことになるということだそうです。どうしてか。この歌の大意は、「明石の浦の朝霧に、島に隠れて見えなくなりながら進む船を思う」です。明石という場所の説明として、ただ単に「明石に冠する五文字」をつけるならば、「播磨なる明石」と言えば良いんですね。注釈に、明石は播磨国にある地名だと書いています。それをあえて「ほのぼのと」という言葉を冠したということは、「ほのぼのと明らかなと言ふを、言の花のにほひにしたるなり」ということになる。「ほのぼのと明るい明石」という意味になり、「明石」という文字と、「ほのぼのとした明るさ」というものが重なり合うおもしろさがある。それが「言の花のにほひ」、つまり言葉が花のような色美しさを持つ（＝装飾によるすばらしさを持つ）ということなんですね。掛詞のようなおもしろさが、修飾語一つの違いによって加わってくると言う具体例なんです。問3の解答は、「『播磨なる明石の浦』ではなく、『ほのぼのと明石の浦』と詠むことで、『ほのぼのと明るい明石の浦』という意味になり、「明るい」と「明石」という掛詞のような技巧が生まれ、おもしろい歌になるということ」が正解です。

「その時代にも飾らずありのままによめるもあり。人の化粧したると、ただがほなるとのごとし。」ただ、技巧が生まれたきた時代にも、技巧も何もしないに詠まれた歌もありました。「人の化粧したると、ただがほなるとのごとし」、つまり、「人が化粧をしている状態と、素顔（ただがほ）でいるのがあるように」。「ごとし」が登場しましたので、「比況」、近い言葉で言うならば比喩の登場です。比喩は、「AのようにBということ」という形で、Aに比喩内容を、Bに直截表現を入れれば綺麗に説明できます。「彼女はバラのようだ」と言っても、「バラのように美しい」のか、「バラのように危険だ（棘がある）」のかによって、意味は大きく変わってしまいますよね。

ここでは、「技巧のある和歌＝化粧顔」、「技巧の無い和歌＝素顔（ただがほ）」という転換がされていることには気づいたでしょう。さらに言うならば、人の顔に、化粧顔と素顔、どちらもその人の「顔」ですよね。それと同じように、和歌も、技巧のある和歌、無い和歌のどちらも「和歌」である。問4の解答は、「化粧顔と素顔のどちらも『顔』であるように、技巧を凝らした和歌がある一方で、和歌本来のありのままを詠む和歌も存在し、そのどちらも『和歌』だと言えるということ」くらいに落ち着けばいいでしょう。

以上、歌論でした。

歌論では、「技巧の有無」「言葉遣い」「アイデア」「早吟、遅吟」「当意即妙」などについて論じられたものが多いという印象があります。歌論に触れる機会があれば、どのようなテーマが論じられているか、記憶にとどめておくことをおすすめします。